

漢墓の変容

— 槨から室へ —

黄 曉 芬

【要約】 中国古代の埋葬施設の中で最も代表的なものは竪穴系の木槨墓と横穴系の磚室墓である。前者から後者への推移は、中国墓制史上の大きな画期として認められ、それは東アジア地域に多大な影響を与えた。しかしながら、たとえば槨については文献の引用や解釈などに曖昧な部分が多く、定義すらいまだはっきりしていない。加えて、それら異なる二種の埋葬施設がもつ複雑さと多様性のために統一的な理解に欠けている。本稿は、発掘調査の資料に基づき、漢墓における槨と室の構造に関する資料集成を行い、槨と室の型式変遷を提示し、両者の統一的な把握を試みた。それによって、槨が漸移的な変化を遂げて室の完成に至る過程を明らかにすることができた。その中で、回廊施設の形成、玄門と横入口の整備、それに続く祭祀空間の発達が槨から室への変容に決定的な役割を果たしたと言える。この漢墓の変容は、あくまで内在的な変化であり、被葬者とその身分を象徴する持ち物だけを入れるための密閉型の墓から、被葬者の社会的地位に応じた葬送執行の場としての立体的な墓へという埋葬思想や社会理念の変化を体現したものであった。

史林 七七卷五号 一九九四年九月

はじめに

中国史上、秦漢帝国の統一は中国の内外に政治、社会、文化の諸方面にわたって大きな影響を与えた。また、その後の歴史を方向づけたとも言われている。この時代の文化は馬王堆漢墓^①や中山王墓^②など、かろうじて盗掘を免れた墓の発掘資料によってよく表されており、その時代を豊かに彩っている。しかし、すでに発掘調査された一万基以上の漢墓や、また

無数の未調査資料を含めた膨大な資料に基づく考古学的研究によって、当時の社会をより明らかにすることが求められている。

中国の埋葬施設における最大の構造上の特徴として槨と室がある。槨は棺を納めるものと単純には理解されるが、従来の調査と研究によって、槨が廃れ、磚室や石室が登場してくるのが漢代にあること、特に後漢時代にそうした室の構造が領土全域に広がったことが明らかになってきている。これら槨と室とは、それぞれ堅穴系の木槨墓と横穴系の磚室墓にもっともよく代表されるものであるが、構造から見てその差は当然埋葬に関わる思想的な差でもあったろう。すなわちその推移は中国墓制史上の画期的変化と言えるのである。しかし、この異なった二種の埋葬施設自体の多様性と複雑さによって両者の統一的な理解に欠けている。また、文献記載の引用やそれに関する解釈などにも曖昧な部分が多く、槨の概念と定義すらはつきりとしていないのが現状である。そのために、調査報告書や論文には、つねに両者の概念の混用が見られ、「槨室」というような名称がしばしば用いられたりもしている。

本稿は、発掘の調査資料に基づいて漢墓における槨と室の統一的な型式分類を行った上で、前者から後者への推移過程について具体的に検討を加え、墓制と葬送思想における変革の様相を明らかにしたい。

① 湖南省博物館等『長沙馬王堆一号漢墓』文物出版社、一九七三年。

② 中国社会科学院考古研究所等『滿城漢墓發掘報告』文物出版社、一

九八〇年。

一 研究の現状と問題点

まず、研究史をふりかえっておこう。槨の定義をめぐっては、中国よりも日本でいち早く論争が起こったことは周知のことである。しかし、当時中国において古代の墓の発掘調査はほとんどなく、文献に記載された槨槨の具体像を実証することは困難であり、一九一五年頃に日本の学会をにぎわしたこの槨槨論争は進展せずに終わった^②。一九三〇年代に入る

と、日本人考古者によって楽浪漢墓が発掘され、漢墓は木槨墓と磚室墓という二種の構造を有することが明らかにされ、漢墓に関する最初の認識が得られた。一九三四年、水野清一は楽浪漢墓の調査資料に基づいて、まだ当時中国で稀だった他の資料とも比べ、漢墓を木槨墓と磚室墓に分類し両者の構造上の差異を検討した。そして文献を参照したうえで木槨墓と磚室墓の時期編年を試み、前漢期に一時的に出現した空心大磚墓の屋根形の頂部が、以後の磚室墓の穹窿頂の祖形となったと考え、漢墓の変遷を推定した。さらに氏は、漢代磚室墓の天井が高く、横に羨門のある構造は、直接高句麗の横穴式石室墳を発生させ、間接に日本の横穴式石室墳の発生をもたらしたものである、と力説した。考古学の調査資料がかなり不十分であった当時において、その問題意識や見解の明快さは評価すべきであるが、漢墓構造の編年や議論および槨・槨と室に関する認識などについていくつかの問題が残った。

この水野の変遷観を肯定した上で、一九三六年に駒井和愛は、磚室墓の主要建材として使われた小型の磚の平手や小口などに幾何学文様がよく描かれることに気づき、それらの文様を考察した結果、最古の裝飾磚文様は槨材の断面木理に起源したと考え、漢代の木槨墓と磚室墓の関連を文様型式学より検証したのである。^④翌一九三七年、日本留学を経験した丁士選は、日本人学者の考証を評価する一方、当時河南地域で見つかった漢代磚室墓を調査し、空心大磚墓の型式分類や考察を行った。そして空心大磚墓が箱形から屋根形へ変わり、やがて消失することを把握し、また「宮」の旧字の字源分析によって、空心大磚墓の屋根形と穹窿頂磚室墓とは実は無関係であることを説いて、水野説を批判した。^⑤

新中国が成立して以来、漢墓の調査資料は急速に増え、中国、日本の考古学者は漢墓構造の研究に大きな関心を寄せた。一九五九年、洛陽地域における中小型漢墓二二五基の発掘調査資料に基づいた『洛陽燒溝漢墓』は、漢墓の構造や副葬品、裝飾文様などの型式分類に優れた研究成果をあげて、今でも漢墓編年の基準となっている。^⑥洛陽燒溝漢墓においては、坑道式土洞墓が主体を占め、前漢中期から後期まで(洛陽燒溝編年の第一、二期)は平頂が特徴的で、その中に木槨墓を模した空心磚墓がある。そして、洛陽燒溝編年の第三期(紀元前三二二～紀元三九二)に変化が見られ、小型磚で構築したアーチ頂

の墓室が出現し、ついに後漢初頭において穹窿頂が発達したことが解明された。こうして、漢墓構造が前・後漢の間に大きく変化したことが、洛陽地域における中小型漢墓の学術的調査によって明らかになったのである。しかしながら、洛陽焼溝漢墓の調査例には前漢中期前半より以前の資料がなく、当時盛んに使用されたはずの木槨墓の様相および木槨墓と磚室墓の転換過程に関する重要な手がかりを欠いていた。

木槨墓の構造については、一九六〇年代まで考古学による研究はほとんどなされず、むしろ文献に頼ったものが多かった。研究が本格化するのは、一九六九年、高去尋が河南省安陽殷墟で調査された殷代の大型木槨墓の構造や意義をまとめたことからであった。^⑦七〇年代に入ると、北京大葆台漢墓、長沙馬王堆漢墓など、漢代王侯クラスの大型漢墓が続々と調査されはじめ、木槨墓を含めた漢墓構造の研究が進んだ。史為は、考古学の調査資料と文献資料を総合して長沙馬王堆漢墓を中心とした漢代大型墓の棺槨制度を考察した。^⑧また、兪偉超は文献資料を参照して漢代王侯墓の構造の特徴を整理した上で、中国古代の墓制は、「周制」、「漢制」、「晋制」の三段階を経て変化してきたと指摘した。これは埋葬施設の変遷と社会の発展との関連を説いたものとして当時大きな反響を呼んだ。^⑨

一方、漢墓の各形態の個別研究も進展を見せた。漢代磚室墓の構造や時期編年については、山田幸一が精力的に考察を加えている。^⑩また呉曾徳、肖元達は、漢代の画像石墓の資料を収集し、石刻文や文献資料を参照して、漢墓構造の特徴が家屋化であることを論じた。^⑪そして長谷川誠一は、漢代磚室墓に見られたアーチ頂構造は西アジアに起源したという外来説を主張し、また地域的特色である空心大磚墓の屋根形頂部を擬穹窿頂とみなし、それが穹窿頂の初現であるとして、穹窿頂空心大磚墓起源説を再び提起した。^⑫

その後、開発事業に伴う漢墓の調査資料は増え続け、漢墓構造についての議論が一層活発となり、町田章の漢墓に関する諸考察^⑬、西村俊範の漢代大型墓の構造についての検討および王仲殊の漢墓構造に関する概説^⑭などの注目すべき発表が相次いだ。しかしながら、これらの論述は、概ね調査資料を説明して文献資料に照合させるという傾向が見られる。かつ、

埋葬施設における木槨墓から磚室墓へという異質なものの転換が、いったいどういう形で起こったのか、どのような社会背景を映し出しているのかについては依然不明のままであり、前述した小磚の文様の木理起源説にしても推測の域に留まり、納得できる実証資料に乏しい。また、空心大磚墓の穹窿頂起源説も調査資料に基づけばむしろ疑わしいのである。

そうした中で、町田章は横穴式墓室の誕生について一つの仮説を提起した。町田は『史記』『秦本紀』や『水経注』などの文献記載から、秦の始皇帝が墓の中に自然界と人間のかかわりのすべてを持ち込もうとして、広大な兵馬俑坑などを陵の付属施設として横穴式墓室のように作ったことを説き、そして秦国の地域色である土洞墓構造の存在を加味し、秦代に「画期的な横穴式墓室を創造した可能性が強い」と考えた。^⑩確かに坑道式土洞墓は横口の構造をもち、横穴式墓室に一番近い。しかし、それはあくまでも、地域色の濃厚な中小型墓にしか見あたらぬ。秦の兵馬俑坑もただ規模の大きい堅穴式の埋藏墳で、横穴式の埋葬施設にはなっていないし、^⑪前漢前期の景帝陽陵の副葬品埋藏墳も同類型に属し、すべて堅穴式槨の構造である。^⑫そして今まで見つかった前漢前期の王侯墓クラスの大形墓は、一部例外を除いてすべて複雑な槨墓の構造に作られ、横穴系室墓の存在は認められない(詳細は後述)。したがって坑道式土洞墓が皇帝、王侯墓にまで影響を与え、さらに急速に全土に広がっていったと単純に解釈すべきかどうか大いに疑問である。

こうした磚室墓の坑道式土洞墓起源説は、一部の学者から提唱されながらも、考古学的に検証することはかなり難しく、未解決のまま今日に至っている。私は、漢墓の構造それ自身の変遷を把握することがそれらに対する解答を提示することにつながるかと考え、以下に論述を試みたいと思う。

① 大正初年の棺槨論争である。論争の焦点は、埋葬施設における用語の問題にあり、主として喜田貞吉と高橋健自の間で「棺」と「槨」の語義と、それを日本の古墳の内部主体にどう当てはめるかをめぐって行われた。喜田説は、棺は遺体を直接納めるものをいい、古墳で発見される石棺は中に木棺を入れるもので、これは槨であるとした。これ

に対して高橋は石棺は棺であると主張した。だが、二人とも中国古代の文献を根拠にして日本の古墳の構造に当てはめようとしたことにもとも無理があった。しかも膨大な量の中国文献には、記録自体に矛盾が存在し、また文献の引用や解説の角度などによっても認識が違ってくる。結局、当時の中国古代の墓の発掘調査の少なさとあいまって、

棺槨構造の具体像は未解決のまま、この論争は終わった。

- ② 高橋健自「再び喜田博士の古墳論を評す」『考古学雑誌』第四卷第九号、一九一四年。喜田貞吉「再び古墳墓の年代に就て、附棺槨の意義に就て」『考古学雑誌』第四卷第一〇号、一九一四年。高橋「石槨石槨及び墳を論ず」『考古学雑誌』第五卷第一〇号、一九一五年。高橋「石槨石槨及び墳を論ず」『考古学雑誌』第六卷第八号、一九一六年。喜田「棺・槨・墳再弁」『喜田貞吉著作集』2、古墳年代の研究、平凡社、一九七九年。
- ③ 水野清一「支那に於ける木槨墓と磚室墓」『考古学雑誌』第二四卷第一号、一九三四年。
- ④ 駒井和愛「漢代墳墓の埴輪と題湊」『人類学雑誌』第五一卷第二号、一九三六年。
- ⑤ 丁士選「埴輪瑣言」『考古』第六期、燕京大学考古社刊、一九三七年。
- ⑥ 中国社会科学院考古学研究所『洛陽燒溝漢墓』科学出版社、一九五九年。
- ⑦ 高去尋「殷代大墓の木室及其涵義之推測」『中央研究院歷史語言研究所集刊』第三九本（慶祝李方桂先生六十五歲論文集）一九六九年。
- ⑧ 史為「長沙馬王堆一号漢墓の棺槨制度」『考古』一九七二年六期。
- ⑨ 俞偉超「漢代諸侯王与列侯墓葬的形制分析——兼論「周制」、「漢制」、「晋制」的三段階性」『中国考古学会第一次年會論文集』文物出版社、一九八〇年。
- ⑩ 山田幸一「漢代磚墓の変遷とその分布について」『関西大学東西学術研究所紀要』第二号、一九七九年。
- ⑪ 吳省德、肖元達「就大型漢代画像石墓的形制論「漢制」——兼談我國墓葬的發展進程」『中原文物』一九八五年三期。
- ⑫ 長谷川誠一「中国における拱式架構の出現」『考古学雑誌』第五七卷四号、一九七二年。
- ⑬ 町田章「古代中国における下級墓葬について」『史泉』二六〇二八、一九六三年。「漢河南縣城墓葬考」『考古学雑誌』第五四卷第一号、一九六八年。「漢代南越國墓葬考」『東方学報』第四六冊、一九七四年。「前漢帝陵の構造」『江上波夫教授古希記念論集——考古・美術篇』一九七六年。
- ⑭ 西村俊範「漢代大型墓の構造」『史林』第六二卷六号、一九七九年。
- ⑮ 王仲殊「漢代考古学概説」中華書局出版、一九八四年。
- ⑯ 町田章「華北地方における漢墓の構造」『東方学報』四九、一九七七年。
- ⑰ 陕西省考古研究所等「秦始皇陵兵马俑坑——一号坑發掘報告」文物出版社、一九八八年。
- ⑱ 陕西省考古研究所漢陵考古隊「漢景帝陽陵南区從葬坑發掘第一号簡報」『文物』一九九二年四期。「漢景帝陽陵南区從葬坑發掘第二号簡報」『文物』一九九四年六期。

二 漢墓構造の分類

1 槨と室

漢墓の中心施設は構造上の特徴から大別すると、槨と室の二種類に分けられる。ここではそれぞれの特徴によった漢墓

構造の型式分類を提示し、続いて時間軸に沿って整理を行いたい。そのためにできるだけ紀年銘のある例や埋葬年代の明確な大・中型漢墓の発掘調査資料を編年の基準として考察することにした。しかし、その前にまず柳と室の用語についてはっきりさせておかなければならない。

中国における埋葬施設の主流は、もともと堅穴系の棺槨墓であった。棺の出現は新石器時代の青海省柳湾馬家窯文化の半山類型(紀元前二五〇〇年頃)に遡る。棺とは単に遺体を納めるものであり、『説文解字段注』の「棺」の解釈の通り、「闕(闕閉)也、所以掩屍」で、埋葬に関する最も基本的な埋葬施設である。最初、形態はさまざまであったが、次第に直方体の箱式に定形化された^①。それが山東龍山文化晩期頃(紀元前一六〇〇年頃)になると、木棺のまわりに豊富な副葬品を揃えた有力者の墓が出現し、山東省臨淄西朱封M二〇二のように墓壙内に材木を用いて棺と副葬品を囲んだ長方形の枠を組み立て、埋葬行為ののち全体を蓋板で閉塞する構造が創り出された^②。これが柳の最古形態である。つまり、柳とは、社会階層の分化を背景にして出現したもので、多数の副葬品を入れる空間を与えるために創り出されたものである。ここでは、棺と離れた副葬品の収納施設も柳と呼ぶこととする。

最初の柳は、棺の周囲に角材を用いて意識的に空間を設けたものであり、次第に特定の空間をもつ箱形構造へ定式化していった。正しく『説文解字段注』の解釈のように「木柳者、以木為之周於棺、如城之有廓也」である。殷・周時代の王権社会の中で、こうした箱形の柳が普遍的になり、その使用は身分の象徴として確立し、大・中型柳が王室貴族たちに独占的に使用された。春秋戦国時代に入ると、柳の構造は一層複雑になり、柳の成熟期を迎えた(図二)。以上の柳構造は複雑ではあるが、いずれも密閉型で、しかも深く埋蔵するのが特徴的である。その具体像については後述するが、この柳を埋葬施設の主要部にするものを柳墓と呼ぶことにする。

一方、柳に対して室とは、『説文解字段注』の解釈に「古者前堂後室……引申之則凡所居皆曰室」とある。室は本来人間の住む所を表すもので、前堂後室が中国古代建築の代表的な様式であった。普通、建物の中に一つの壁を設け、前側を

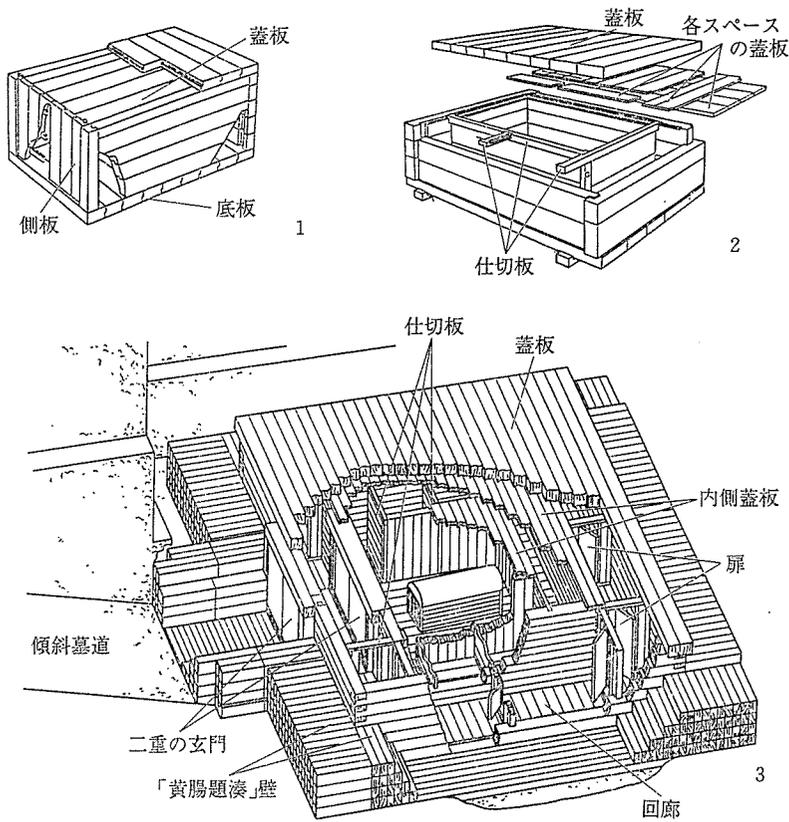


図1 柳の各部名称

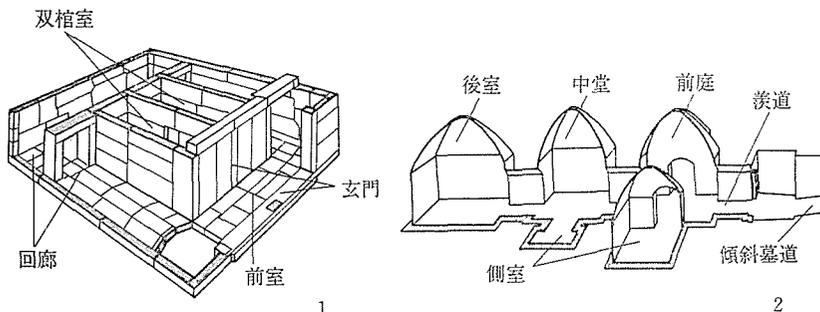
- 1 箱型柳 2 間仕切型柳 3 柳護型柳

「堂」、後側を「室」と名付け、室の両側の部屋にある空間を「房」と呼んでいる。漢代の埋葬施設における室というのは、現実社会に実在する家屋の様式を真似た墓の作りである。その基本的な構造は、磚や切石で羨道や玄門、前堂後室などを中軸線上に築き、回廊施設や側室を対称的に配置する。各部の天井は、アーチ頂や穹隆頂がほとんどであり、全体として自由に出入りすることのできる全面開通型の立体的な空間となっている(図二)。こうした墓を柳墓に対して室墓と呼ぶことにする。

2 柳墓の諸型式

漢代の柳は、角材の組み立て方によってさまざまな変化が見られ

漢墓の変容(黄)



1

2

図2 室の各部名称

1 回廊型

2 中軸線配置型

る。出土資料に基づいて漢代の槨墓を集成すると、箱型・間仕切型・槨護型の三型に分けられる。

【Ⅰ 箱型槨】 槨の中で最も古く、しかも単純な構造をもつタイプである。竪穴式の墓壇内に、角材で槨の底板を敷き、それから四壁を組み立て、上から棺や副葬品を入れた後、蓋板をする箱形の構造が一般的である(図一—一)。

槨の封口板の位置によって竪口式と特異な横口式の二種に分けられる。

〈Ⅰ型Ⅰ式、箱型竪口式〉 封口板の位置が槨の頂部にあるもの。

一重の箱型槨内に木棺や副葬品を入れてから蓋板をかける。西安市北郊漢墓M一三^④や山西省孝義張家莊漢墓M八^⑤などがその代表例である。これより複雑な形態としては、西安北郊龍首村M一五^⑥と陝西省臨潼縣新豐鎮M五^⑦がある。前者は竪穴墓壇内に被葬者の木棺を入れる主槨と副葬品用の付属槨があり、主槨が大きく、両側の同形同大の付属槨が相対的に小さい(図三—一)。

〈Ⅰ型Ⅱ式、箱型横口式〉 封口板の位置が槨の側面にあるもの。

中国の北方地域では、黄土高原の地質に関係した坑道式土洞墓が先史時代から作られてきた。坑道式土洞墓は、土壙を垂直に掘ってその底部に平頂の土洞を作るものである。それが秦人の特徴的な墓制として春秋戦国期から前漢にかけての中小型墓に広がった^⑧。漢代におけるこの種の槨墓は、平頂土洞内の内壁いっぱい箱型槨を角材で組み立てたものであり、またこの構造ゆえに槨の側面を入口として使い、埋葬を終えてそこを木板で閉塞する仕組みになっている。西安市北郊龍首村M四^⑨と

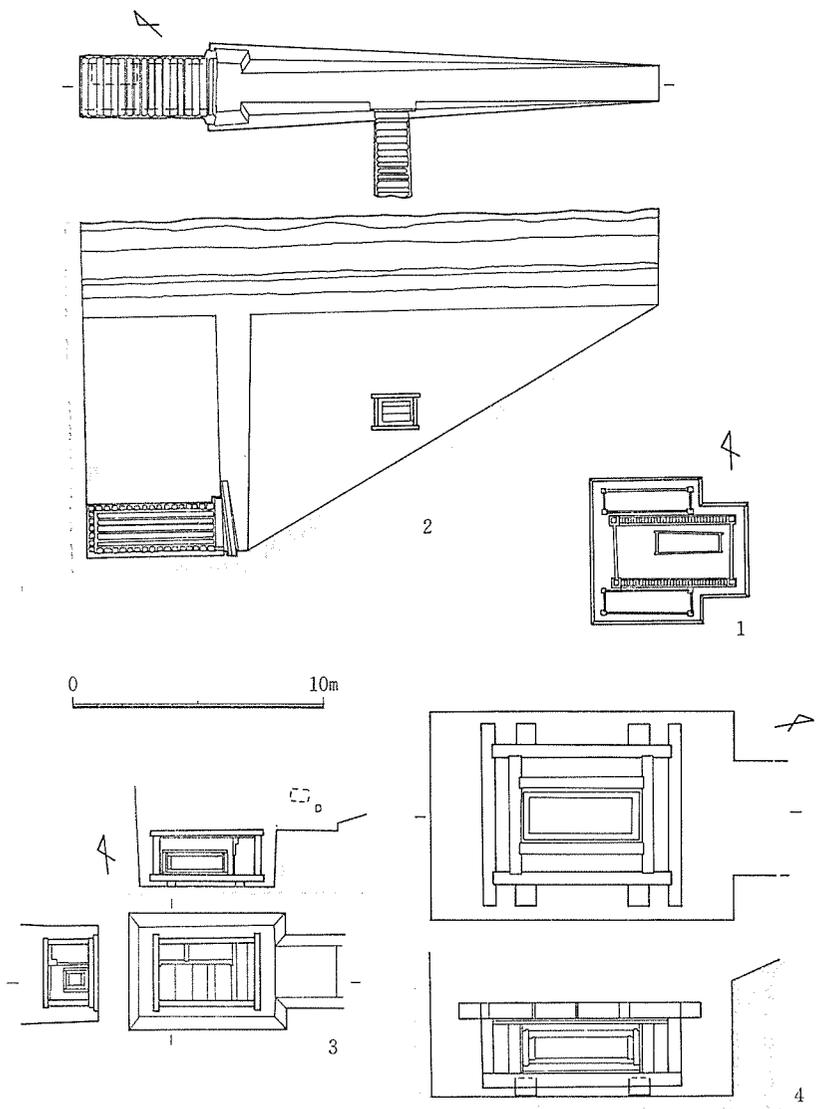


図3 漢代槨の型式

- 1 箱型豎口式：西安北郊龍首村M15
- 2 箱型横口式：西安東郊國棉五廠M6
- 3 間仕切型非対称式：湖北江陵M168
- 4 間仕切型対称式：湖南長沙砂子塘

西安市西北医療設備廠M九二がその代表例である。

これに傾斜墓道を加えたものが傾斜墓道付土洞墓である。西安西北国棉五廠M六と西安市北郊「陳請士」墓がその好例である。国棉五廠M六は土洞が長さ五・四メートル、幅二・五メートル、高さ二・三メートルに對して、箱型槨は長さ五・四メートル、幅二・三メートル、高さ二・一メートルである。このように平頂土洞の内部空間いっぱい箱型槨が組み立てられ、中に木槨が納められている。また傾斜墓道中段の南側壁に副葬品用の付屬槨がある(図三一・二)。

【Ⅱ 間仕切型槨】 仕切板で長方形の箱型槨内をいくつかの独立した空間に区切り、棺や副葬品など用途別に入れて、最終的に槨の頂部から蓋板を用いて密閉する仕組みである(図一―二参照)。槨内の各空間の配置によって非対称式と対称式に分ける。

〈Ⅱ型1式、間仕切型非対称式〉 棺のスペースが槨全体の一侧に寄って、棺の頭側や身体側に副葬品入れのスペースを有するもの。

一般に槨内を三つから五つの埋藏空間に区切る例が多い。湖北省江陵鳳凰山M一六八は、その典型的な例で、高さ二・一九メートルの槨内には、二重棺用のスペースが一つと、副葬品用のスペースが棺の頭部に一つと棺側に二つの計四つ設けられている(図三一・三)。また湖北省雲夢県大墳頭M一^⑭や湖北省江陵県張家山M一三六・一二七なども同様の構造をしている。

〈Ⅱ型2式、間仕切型対称式〉 棺のスペースを中心にし、そのまわりに副葬品用のスペースがほぼ対称的に配置されたもの。

湖南省長沙砂子塘漢墓はこの種の槨構造の典型である。槨内には棺のスペースを中心として、回りに四つの副葬品用のスペースが対称的に配置されている(図三一・四)。これと同型式のものに湖南省長沙市馬王堆M一^⑮、陝西省咸陽楊家湾M四・M五^⑯および安徽省阜陽双古堆汝陰侯墓などがある。

【Ⅲ 柳護型柳】 柳の内部構造は間仕切型対称式の範疇で捉えられるが、さらにその外周にきれいに整った角材で作った特殊な壁を加えたものである(図一—3参照)。その特殊な壁とは、約一メートル前後の角材を用いて中心の棺柳に木口を向けて柳外周に丹念に積み重ねたものである。文献に記載された天子・王侯しか用いることのできない、いわゆる「黄腸題湊」に一番近い形態と考えられる。柳の内部の構造によって間仕切式と回廊式に分ける。

〈Ⅱ型1式、柳護型間仕切式〉 間仕切型対称式柳の外周に特殊な柳護壁を積むもの。

河北省石家莊北郊漢墓^①と湖南省長沙市曹嬭墓^②がその代表例である。長沙曹嬭墓は、傾斜墓道付長方形墓壙の四壁に沿って、特殊な壁を構築した複合構造である。角材の木口を揃えて積み重ねた特殊な壁は厚さ約一・一メートルを計る。内部の柳は間仕切型対称式構造で、仕切板で柳内の空間を六つに区切っており、中央部に三重の木棺を納める棺のスペースがある。そして、そのまわりに副葬品用の空間がほぼ左右対称に五つ配されている(図四—1)。各空間の間は従来の柳同様、完全に独立し、埋葬行為は最終的に柳の頂部に蓋板をかけて終える。

〈Ⅱ型2式、柳護型回廊式〉 Ⅲ型1式柳の発展形態というべき構造で、回廊の創設や玄門、入口の整備などによって密閉された柳の構造が崩れているもの。

湖南省長沙市西郊望城坡古墳坑の前漢前期王室墓^③、長沙象鼻嘴一号墓^④及び江蘇省高郵県天山一号墓^⑤はその代表的な墓例である。長沙象鼻嘴一号墓(図四—2)は、ほぼ方形の墓壙内に大型の柳が構築され、厚さ一・五メートル前後の特殊な柳護壁が柳外側に丁寧に積み上げられている。柳の内部構造は、間仕切型対称式と同様、棺の空間が中央部に配置されるが、そこは二重の玄門を経て傾斜墓道へと一直線に続き、門柱などの横入口の施設が整備されている。墓道、中央施設そして左右の回廊施設につながる二重の玄門の間が重視されているようで、ほかのところより一段高くなり、意識的な整備の跡が認められる。中央の棺をとりまくように一重の薄い隔壁があるが、玄門方向には壁は設けられておらず、三面囲となつている。それらを囲んで内、外二重の隔壁が設けられ、柳全体の平面プランが回字形を呈している。内側壁と三面囲隔壁

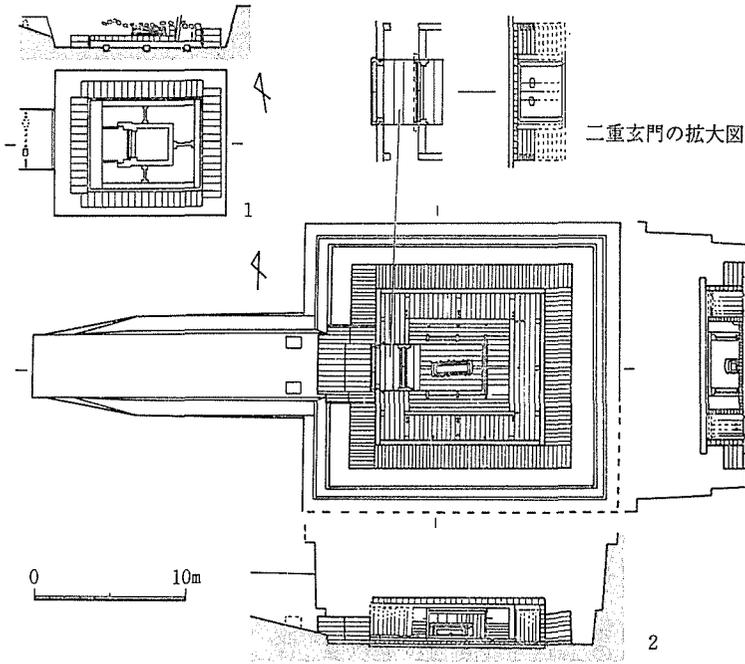


図4 柳護型柳の構造

- 1 柳護型間仕切式：湖南長沙曹孺墓 2 柳護型回廊式：湖南長沙象鼻嘴M1

によってできあがった空間(報告書に内回廊と呼ぶ)は、仕切板で七つの小空間に分けられ、密閉された柳構造が見られる。また内隔壁と外隔壁に挟まれた空間も、やはり、仕切板で十二の小空間に分けられているが、従来の密閉構造と違って各仕切板には扉が付いている。すなわち、全体としては間仕切型構造のように見えるが、実際は二重玄門や仕切板の扉の設置などによって開通空間ができあがっているのである。柳頂部は高さ二〜三メートル前後の平頂で、従来と同じく各空間ごとに閉めている。この複雑な構造は図一—3のように復原できる。

3 室の諸型式

典型的な室の構造は、調査資料によると、回廊型と中軸線配置型との二型式に分けられる。

【I 回廊型室】柳護型回廊式柳墓を踏襲したものと考えられる。一直線上に並んだ墓道、羨道、玄門および中央棺室と棺室を囲んだ回廊施設が特

徹的である。棺室の前方すなわち両玄門の間が柳護型回廊式柳と同様に重視され、新たに前室として発達し、後側の棺室とともに前・後の二室プランを完成させている(図二一)。室の天井部は平頂やアーチ頂のものが最も一般的であるが、時には穹窿頂の工夫も見られ、广大で立体的な空間が作り出されたものもある。棺室の数によって単棺室と双棺室に分けられる。

へI型1式、回廊型単棺室① 中央棺室が単棺室であるもの。

河北省定興北莊の中山簡王墓②、江蘇省邳県彭城相「繆宇」墓③、山東省済寧市漢墓④および河南省南陽唐河針織廠M二⑤がその代表例で、いずれも磚あるいは切石で構築した回廊型墓室が特徴的である。中山簡王墓は、墓道、羨道や羨門、玄門、回廊施設および前室と棺室から構成される。棺室は中心に設けられ、その前面に横長の前室があり、棺室の左右と後側を回廊施設がとりまいて前室の両側につながっている(図五)。そのほぼ正方形の室の平面プランや室内部の構造は長沙象鼻嘴一号墓の柳護型柳と極めて似ている。新しい構造としては、羨道や玄門施設の整備と室内の天井部がすべてアーチ頂で作りに上げられていることがある。特に前室のアーチ頂は、六・三メートルと高く、当該墓室の最高所となっている。また、磚室全体をとりまいて切石による柳壁のような構築が見られるが、磚室との間はすべて版築土で充填してある。

へI型2式、回廊型双棺室① 中央部に同大の双棺室が並列し、それと対応して玄門が一つずつ設けられているもの。

河南省南陽唐河の漢郁平大尹「馮君孺人」墓⑥、江蘇省邳県甘泉M二⑦、南陽唐河針織廠漢墓⑧および河南省方城県東関画像石墓⑨などが類例として挙げられる。「馮君孺人」墓は、室の各部分は回廊型単棺室と一致しており、切石で底部や各室の壁を構築し、床、天井や隅の細部などを磚で組み立てたものである(図六一)。羨道の玄門近くに対称的に配置された副葬品用の側室がある。各室の天井部は、回廊と棺室が平頂で、羨道と側室がアーチ頂であるのに対して、前室の天井部は特に高く穹窿頂となっている。頂部の特徴からすれば、前室と呼ぶよりも前堂と称する方がふさわしい。

【Ⅱ 中軸線配置型室】 基本的な構造は墓道、羨道、通過甬道、玄門や中軸線配置の前堂・後室があり、その両側に複

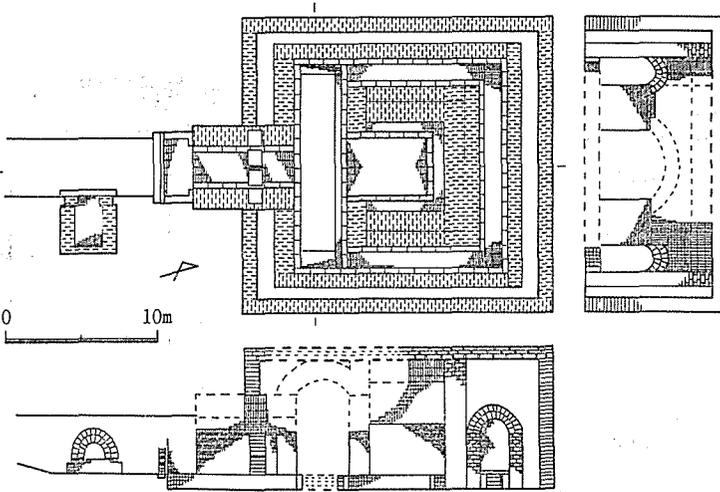


図5 回廊型単棺式室の構造：河北定県北莊中山王墓

数の耳室や側室がほぼ左右対称的に配される。各墓室の天井はアーチ頂が一般的で、前室には穹窿頂の仕組みが多く見られる。主要墓室の配置によって前室・後室の二室式と前庭・中堂・後室の三室式に分けられる。

〈Ⅱ型1式、中軸線配置型二室式〉 前室・後室を中心としたもの。傾斜墓道付磚室墓が一般的で、地域色として坑道式磚室墓が存在する。

前者の例である陝西省長安県南李王村M三^③は、傾斜墓道、羨道、前室・後室が中軸線上に並び、前室両側に同大の両側室が対称的に設けられている。また祭祀前室の天井部だけが広大な穹窿頂をもち、他室のアーチ頂構造よりきわだっている(図六一②)。

後者の坑道式磚室墓については河南省洛陽「卜千秋」墓^④や洛陽燒溝漢墓M一三一・九四・一〇〇五、洛寧県M四^⑤および偃師県南蔡莊「肥致」墓^⑥などが代表例である。「卜千秋」墓は、玄門、横長前室、後棺室の中軸線上配置で、前室東壁に同大の両側室が対称的に付属している。前室、両側室の天井部は小型磚で積み上げたアーチ頂で、中央棺室のみ空心大磚で組み立てられた四注式屋根形である(図六一③)。燒溝M六三二は同型式の構造であるが、後棺室内に被葬者三人の木棺を並べてあり、棺室の両側に側室が二つある。また、後室

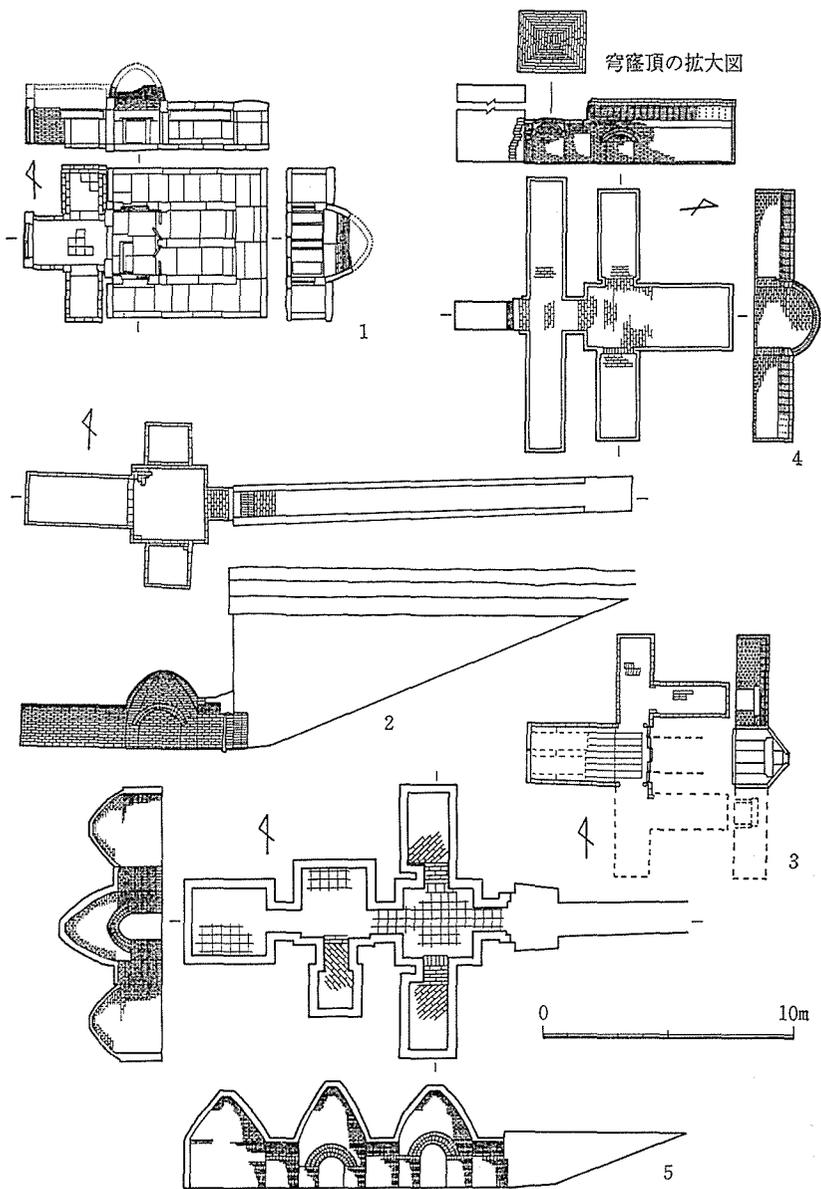


図6 漢代室の型式

- 1 回廊型双棺室式：河南南陽「馮君儒人」墓
- 2 中軸線配置型二室式：西安長安縣南李王村M3
- 3 同：河南洛陽「卜千秋」墓
- 4 同：河南洛陽燒溝M632
- 5 中軸線配置型三室式：內蒙古和林格爾壁画墓

の前方、対称的な側室を左右に配する四方通過甬道は、室内の中間要地として整備され、前室の役割を果たしている。各室の天井部はほとんど成熟したアーチ頂だが、その天井部だけがアーチ頂の積み上げ技法を用いて四隅から頂部へ漸次持ち送りをした結果、微穹窿頂を造りだしている(図六一4)。

〈Ⅱ型2式、中軸線配置型三室式〉 前庭・中堂・後室を中心としたもの。

河北省定興北陵頭M四三^⑧、同省望都県所築村M一・M二および内蒙古和林格爾壁画墓、河南省密県打虎亭漢墓^⑨などが、この類型の代表例であり、そのうち、和林格爾壁画墓がもっとも整った形である(図六一5)。室全体は、羨道、羨門、玄門および前庭・中堂・後室が中軸線上に並び、前庭と中堂に付属した側室が三つある。各墓室の天井部は、すべて広大な穹窿頂で、そして中堂部がより高く、墓室内で最高位置を占める(図二の2参照)。

- ① 青海省文物管理处・中国社会科学院考古研究所『青海柳湾』文物出版社、一九八三年。
- ② 山東省文物管理处・済南市博物館『大汶口——新石器時代墓葬發掘報告』文物出版社、一九七四年。中国社会科学院考古所山東工作隊『山東臨淄朱封龍山文化墓葬』『考古』一九九〇年七期。
- ③ 吳會徳、肖元達「就大型漢代画像石墓的形制論」『漢制』——兼談我國墓葬的發展進程『中原文物』一九八五年三期。
- ④ 中国社会科学院考古研究所唐城隊『西安北郊漢墓發掘報告』『考古學報』一九九一年二期。
- ⑤ 山西省文管會・考古研究所「山西孝義張家莊漢墓發掘記」『考古』一九六〇年七期。
- ⑥ 張達宏等『西安北郊龍首村軍幹所漢墓發掘簡報』『考古與文物』一九九二年六期。
- ⑦ 陝西省考古研究所「陝西臨潼驪山床單廠基建工地古墓葬清理簡報」『考古與文物』一九八九年五期。
- ⑧ 黄曉芬「秦の墓制とその起源」『史林』第七四卷第六号、一九九一年。
- ⑨ 張達宏等『西安北郊龍首村軍幹所漢墓發掘簡報』(前掲)。
- ⑩ 西安市文物管理处『西安医療設備廠福利区九二号漢墓清理簡報』『考古與文物』一九九二年五期。
- ⑪ 呼林貴等『西安東郊国楠五廠漢墓發掘簡報』『文博』一九九一年四期。
- ⑫ 程林泉等『西漢陳詣士墓發掘簡報』『考古與文物』一九九二年六期。
- ⑬ 湖北省文物考古研究所『江陵鳳凰山一六八号漢墓』『考古學報』一九九三年四期。
- ⑭ 湖北省博物館「雲夢大墳頭一号漢墓」『文物資料叢刊』四、文物出版社、一九八一年。
- ⑮ 荆州地区博物館『江陵張家山兩座漢墓出土大批竹簡』『文物』一九九二年九期。
- ⑯ 湖南省博物館「長沙砂子塘西漢墓發掘簡報」『文物』一九六三年二期。
- ⑰ 湖南省博物館等『長沙馬王堆一号漢墓』文物出版社、一九七三年。
- ⑱ 陝西省文物管理委員會、咸陽市博物館等『咸陽楊家湾漢墓發掘簡報』

- 『文物』一九七七年一〇期。
- ⑬ 安徽省文物工作队等「阜陽双古堆西漢汝陰侯墓發掘簡報」『文物』一九七八年八期。
- ⑭ 石家莊圖書館文物考古小組「河北石家莊市北郊西漢墓發掘簡報」『考古』一九八〇年一期。
- ⑮ 長沙市文化局「長沙咸家湖西漢曹嬬墓」『文物』一九七九年三期。
- ⑯ 宋少華、李鄂權「長沙西漢王室墓的發掘概述」(中國考古學會第九次年會論文)一九九三年。
- ⑰ 湖南省博物館「長沙象鼻嘴一号西漢墓」『考古學報』一九八一年一期。
- ⑱ 中國社會科學院考古研究所編「新中國的考古發現和研究」、文物出版社、一九八四年。
- ⑲ 河北省文化局文物工作隊「河北定興北莊漢墓發掘報告」『考古學報』一九六四年二期。
- ⑳ 南京博物館、邳縣文化館「東漢彭城相繼字墓」『文物』一九八四年三期。
- ㉑ 濟寧市博物館「山東濟寧發現一座東漢墓」『考古』一九九四年二期。
- ㉒ 南陽地區文物工作隊、唐河縣文化館「唐河縣針織廠二号漢墓画像石墓」『中原文物』一九八五年三期。
- ㉓ 南陽地區文物隊、南陽博物館「唐河漢都平大尹馮君孺人漢画像石墓」『考古學報』一九八〇年二期。
- ㉔ 南京博物館「江蘇邗江甘泉二号漢墓」『文物』一九八一年一二期。
- ㉕ 周到、李京華「唐河針織廠漢画像石墓的發掘」『文物』一九七三年六期。
- ㉖ 南陽市博物館、方城縣文化館「河南方城東閼漢画像石墓」『文物』一九八〇年三期。
- ㉗ 貞安志他「長安縣南李王村漢墓發掘簡報」『考古与文物』一九九〇年四期。
- ㉘ 洛陽博物館「洛陽西漢卜千秋壁画墓發掘簡報」『文物』一九七七年六期。
- ㉙ 中國社會科學院考古研究所「洛陽燒溝漢墓」科學出版社、一九五九年。
- ㉚ 洛陽地區文化局文物工作隊「河南洛寧東漢墓清理簡報」『文物』一九八七年一期。
- ㉛ 河南省偃師縣文物管理委員會「偃師縣南蔡莊鄉漢肥致墓發掘簡報」『文物』一九九二年九期。
- ㉜ 定興博物館「河北定興四三号漢墓發掘簡報」『文物』一九七三年一期。
- ㉝ 河北省文化局文物工作隊「望都二号漢墓」文物出版社、一九五九年。
- ㉞ 內蒙古博物館、文物工作隊「和林格爾漢墓壁画」文物出版社、一九七八年。
- ㉟ 河南省文物研究所「密縣打虎亭漢墓」文物出版社、一九九三年。

三 漢墓構造の継承と変容

前章でまとめた漢墓の諸型式を漢代以前の諸例から、時間軸に沿って整理し、漢墓の伝統と変容の状況を把握しよう。

すでに述べたように、槨は漢代以前にすでに存在しており、主要な埋葬施設として採用されている。春秋戦国時代には、槨構造として最も初現的な箱型とそれが発達した間仕切型との二つの型式が見られる。箱型槨は先史時代末期に遡り、前漢まで最も長く併用されている。大型箱型槨には、春秋早期の河南省浙川県下寺楚墓M八、春秋晩期の王陵クラスの陝西省鳳翔県雍城秦公一号大墓^②、戦国時代の河南省輝県固圉村M二^③などがある。下寺楚墓M八は、箱型槨内の西側に寄って二つの槨が南北に並列して置かれている。秦公一号大墓は、規模の大きい長方形槨墓で、墓壙底部の中心をより掘りくぼめ、そこに大型角材を用いて箱型の主槨と付属槨を別々に構築している。主槨は長方形で、内部の詳しい状況は盗掘をひどく蒙ったため不明であるが、前、後の二つの空間に分けられていたらしい。同墓壙内からは殉葬者の木棺を確認できたため、被葬者も木棺に入れられたことが推定できる。また、墓壙の東西に長、短の傾斜墓道があり、墓道の底部と棺槨の底部の落差は四・五メートルとなっており槨の高さに一致する。固圉村M二はそれと同じく両側に傾斜墓道を付けた規模の大きい箱型槨墓である。墓壙の底部と槨の四辺を積石でよく整備して中に内、外二重の槨と木棺がある。外側の槨が長さ八・七メートル、幅八・三メートルで、高さも四・六メートルと高い。しかし、これほど規模が大きいにもかかわらず、内、外二重の箱型槨の単純な構造になっている(図七一一)。このように槨内部の空間がどれほど広大であっても、屋敷風の気配はいっさいないのである。そして、防腐のため大量の炭、粘土を棺槨の回りに充填し、さらに両側の墓道に向かって石垣を築くなど、封鎖を強く意図している。日本の古墳時代前半期の葬法と共通した側面が少なくない。

間仕切型槨は春秋中期に楚国地域に出現したらしく、その後、徐々に増加する傾向が見られる。はじめは非対称式が主で、戦国時代に入ってから対称式の槨が登場する。その様相を最も具体的に示している資料は、湖北省江陵雨台山で調査された五五八基の楚墓である。ここは春秋中期から戦国晩期にかけての楚国の貴族の墓地で、槨墓は調査総数の約半分を

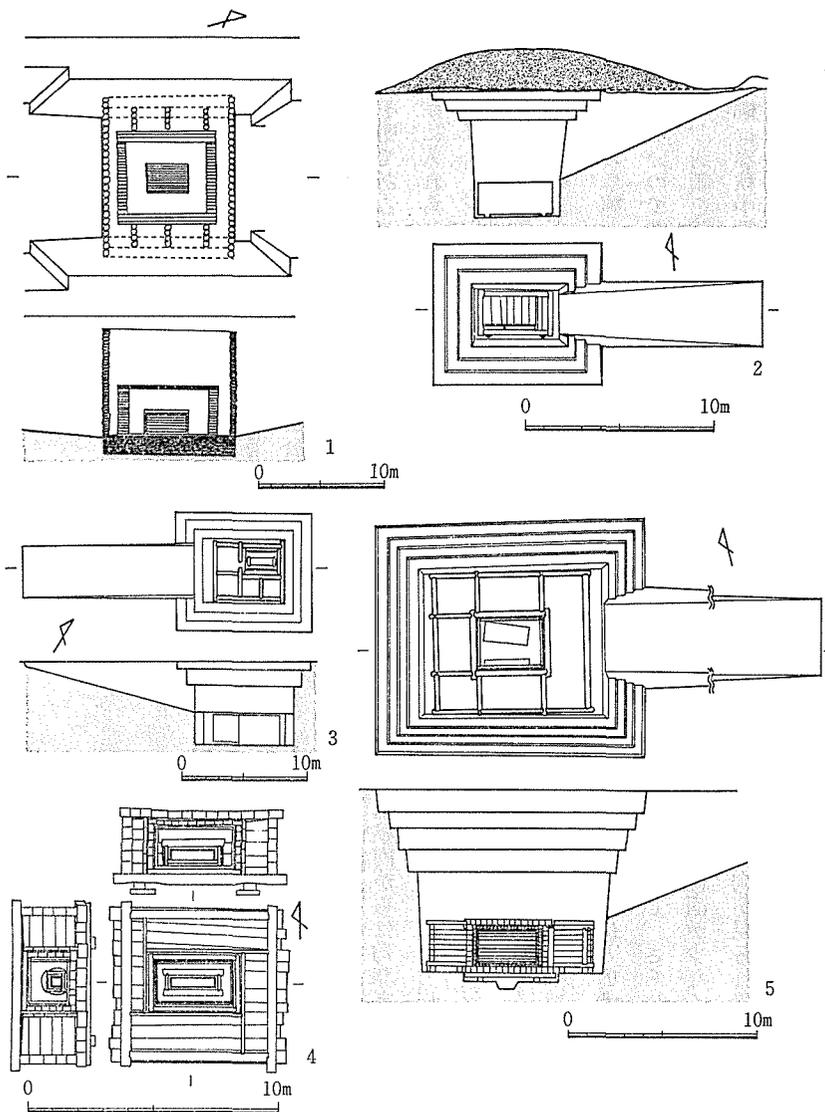


図7 戦国期の槨

- 1 箱型槨：河南輝県固围村M2
- 2 間仕切型非対称式：湖北包山楚墓M1
- 3 同：河南正陽蘇莊M1
- 4 間仕切型対称式：湖北包山楚墓M2
- 5 同：河南信陽楚墓M1

占める。そのうち、箱型構造の古いタイプが七割であるのに対して、間仕切型の槨が三割弱で、时期的にも新しい。春秋戦国期は槨墓が盛んに造られた時期と見てよい。

間仕切型槨の代表例としては、戦国中、後期の湖北省包山楚墓M一・M二、河南省正陽蘇莊M一、楚国大夫の河南省信陽楚墓M一がある。包山楚墓M一^⑤は傾斜墓道付の槨墓で、墓壙内に間仕切型非対称式槨が組み立てられている(図七―②)。槨は仕切板で三つの空間に区切られていて、棺のスペースが槨の一侧にあり、副葬品のスペースが棺の頭側と体側に二つある。正陽蘇莊M一^⑥の埋葬施設もそれと同型式で、合計四つのスペースがそれぞれ独立の空間として配されている。棺のスペース内にもう一つの簡素な箱型槨があつて、その中に木棺が入れている(図七―③)。

戦国後期は、間仕切型非対称式槨が主要なタイプであるが、間仕切型対称式槨も出現する。そして、大型楚墓の槨はさらに複雑な形態をとるようになる。湖北省包山楚墓M二はその代表的な大型墓例であつて、出土した木簡文より楚国左尹が紀元前三一六年に埋葬されたことがわかる。槨は方形で、二重の棺を中心に合計五つの空間が旋回形に配されている(図七―④)。またこのタイプの最も複雑な例が信陽楚墓M一^⑦である。槨の長さ八・九五メートル、幅七・六メートル、高さ三・二五メートルで、棺のスペースを中心に合計七つの空間が仕切板で区切られている。各スペースはそれぞれに蓋をかける独立した仕組みで、木造細工が精密に施され密閉型空間を見事に作っている(図七―⑤)。

ところで、以上に挙げた槨墓の構造図を見てわかるように、すべての傾斜墓道付槨墓においては傾斜墓道底部と墓壙の底部の落差が大きい。一般に三メートル前後で、槨の高さに一致するものが多いのである。これは槨構造(墓壙内の組み立ておよび上から蓋を閉める仕組み)を示すものであり、密閉、そして深く埋蔵するという性格がよく現れている。この落差が大きければ大きいほど典型的な槨であると言ふことができよう。このように、春秋戦国期における箱型と間仕切型との二種類の槨^⑧は、構造型式に違いはあるが、ともに隔絶と密閉を目指している。

以上に見られた槨の伝統は、前漢期にも受け継がれ、多様な変化を遂げながら、使用され続けた。そして、やがてこの前漢期に槨から室への変容が胎動しはじめ、室墓が成立する。槨と室の変遷をまとめると、前漢期は以下の三期に分けられるが、ここでは先に分類した典型的な墓例以外にも、過渡期を表すいくつかの特殊な例を加えて検討し、漢墓の変容についての理解を深めることにしたい。

〈一期〉 中小型漢墓においては、I型I式の箱型槨が最も一般的な存在であった。その例として挙げられるのが西安市北郊漢墓M一三^①で、長方形墓壙の北側に長さ約四メートル、幅と高さが約二・二メートルの簡素な箱型槨があり、槨内に一つの木棺と、副葬品が置かれている。そして、西安北郊龍首村M一五^②(図三一)のような、同一墓壙内に主槨と副葬品の付属槨を分離して組み立てたものがある。

I型2式の横口式箱型槨は先述したように黄土高原地域に偏在し、前漢期全般にわたって長安、洛陽を中心とした中小型の漢墓によく採用された。西安西北医療設備廠M九二^③はこの種の坑道式横口槨墓の代表であり、横口封鎖であるが、箱型槨の構造は基本的に変わらない。槨内に棺の裝飾金具が出土したため棺は別に存在したことがわかる。

時期がやや新しくなると、西安西北国棉五廠M六^④(図三二)のように在地性の強い坑道式横口槨がさらに傾斜墓道を付け加えた形態で見られるようになる。在地の坑道式土洞構造と傾斜墓道の接続は本来、構造上の必要性がない。しかし、ここでは棺、槨を納入する作業空間としての坑道が依然として機能している。こうして人力・財力の無駄にも関わらず、傾斜墓道を意識的に付け加えていることに、商周時代以来、高貴な身分の象徴として存在した傾斜墓道を取り入れて、地域色の濃厚な墓制を積極的に変えようとした姿を読み取ることができるのである。このことから、坑道式土洞墓を横穴系室墓の起源とすることはできない。

箱型槨について間仕切型槨がこの期の漢墓に多く採用されている。湖北省江陵鳳凰山M一六八(図三一三)^④はⅡ型1式の非対称式槨の代表例で戦国期の河南省正陽蘇莊M一の槨と同系列として捉えられる。棺内より出土した木簡から、被葬者は漢代の五大夫の身分であることが知られ、特に「文帝十三年(紀元前一六七)」の紀年文字より前漢前期の中型漢墓の編年基準となっている。そしてⅡ型2式の槨としては、湖南省長沙砂子塘墓(図三一四)^⑤と、長沙国軟侯の妻で紀元前一七四〜一六五年前後に埋葬された長沙馬王堆M一^⑥があり、ともに内部を五つの空間に区切っている槨墓である。さらに前例を發展させた形態が、合計八つの空間をもつ西安市新安磚廠大型槨墓である^⑦。

一方、槨護型間仕切式槨墓もこの期の早い段階に出現する。湖南長沙曹孃墓(図四一)^⑧は、出土遺物や銘文によって長沙王后「曹孃」の墓と推定されている。「黄腸題湊」に比定される特殊な壁は、約一メートル前後の厚みがあり、槨外周を囲んで槨を保護、固定する役割を果たしている。この壁の出現段階では、各空間は依然として対称的に完全に独立した状態で構築され、最終的に槨の頂上から蓋板をかけるという伝統的な方式になっている。

さらにその発展形態である槨護型回廊式槨墓が登場した。一九九三年、湖南長沙望城坡で発掘調査された前漢前期の長沙王室墓^⑨がその典型的な例であり、扉付の回廊施設の内部の高さは二メートルに達する。また長沙市象鼻嘴一号墓(図四一②)は、一期の終末に作られた同類型のもので、墓の規模と同伴遺物から長沙王墓であると推定されている。その「黄腸題湊」壁の厚さは約一・五メートルあり、内、外隔壁などによって平面プランは擬回字形を呈する。内外玄門の間の床面は整備されており、出土した祭祀用品などからみて、そこが墓内の祭祀地として特別に扱われたことが推察できる。そして、仕切板への扉の設置など槨内の各空間の改造によって、全面に開通するような工夫が強くなってきていることが窺え、本来的な密閉型の槨から室へと大きく踏み出した段階であると言える。

先に述べたように傾斜墓道と墓壙の底部落の差は、槨墓の特徴的な存在であったが、槨護型の出現によって、その落差は徐々に下がっていく傾向へと転じた。象鼻嘴一号墓は、その落差が〇・六メートルで、従前の大型槨墓に比べ、はるか

に減少している。それは横入口の整備による出入りの便利さをはかるためであるが、当例にもし墓壇底部の柳の底材を加え、柳内の床面から見た場合、その落差は無いに等しくなる。もはや、横から出入りすることに何の障害もないのである。以上の墓例は、紀年銘や柳構造の類似性、共伴遺物の一致によって、前漢前期(高祖～景帝、紀元前二〇六～一四一年)に比定できる。箱型柳は中小型漢墓のもっとも一般的な存在であり、間仕切型柳は大・中型漢墓によく採用された。そのうち間仕切型対称式柳は地方高官クラスに独占的に用いられたらしい。そして柳護型柳墓についてはほとんど王侯クラスに限定されたようである。

〈二期〉 一期にみた柳墓の諸型式がこの時期にも同時に存在するが、とくに柳護型回廊式柳から発展して回廊型室が整ってきている。また、該時期には河南省洛陽、鄭州およびその周辺地域に特色のある空心大磚墓が造り出された。空心大磚墓とは、中空の大型長方形磚を用い、木柳墓を真似して坑道式土洞墓の中に組み立てるものである。

当該期の典型的な大型柳墓は広陵王墓と推定される江蘇省高郵県天山一号墓である。^② 一期の柳護型柳墓の発展形態であり、「黄腸題湊」壁は縦が二三メートル、横が一一メートルで、壁の厚さ〇・九メートル、高さ四メートルである。それによって、内外に二重の回廊が形成され、内側回廊の仕切板はすべて扉が付き、また、門扉に「中府」、「食官」という漆書文字が明記され、その機能を窺うことができる。中心部に位置する被葬者の眠る空間は、前部の祭祀空間と後部の埋葬空間に分化しつつある。

こうした伝統的な墓例がある一方、地方王侯墓の他の調査例から見ると、従来の伝統にとらわれず、岩山を利用したり、また切石や磚などを用いたりして各地域の環境にあわせて多彩なものが作られた。それぞれにアーチ頂を取り入れるなど、室墓としての整備を進めていったが、随所にまだ柳墓の伝統が残っているのがこの段階の特徴である。

広東省広州市南越王墓は、紀元前一二二二年頃に構築された傾斜墓道付大型切石室墓である。^③ 墓道、玄門、前室、中央棺室が一直線上に並び、また前室に付く両側室が左右対称に配されている(図八一)。ほぼ方形の平面プラン、内、外玄門

漢墓の変容(黄)

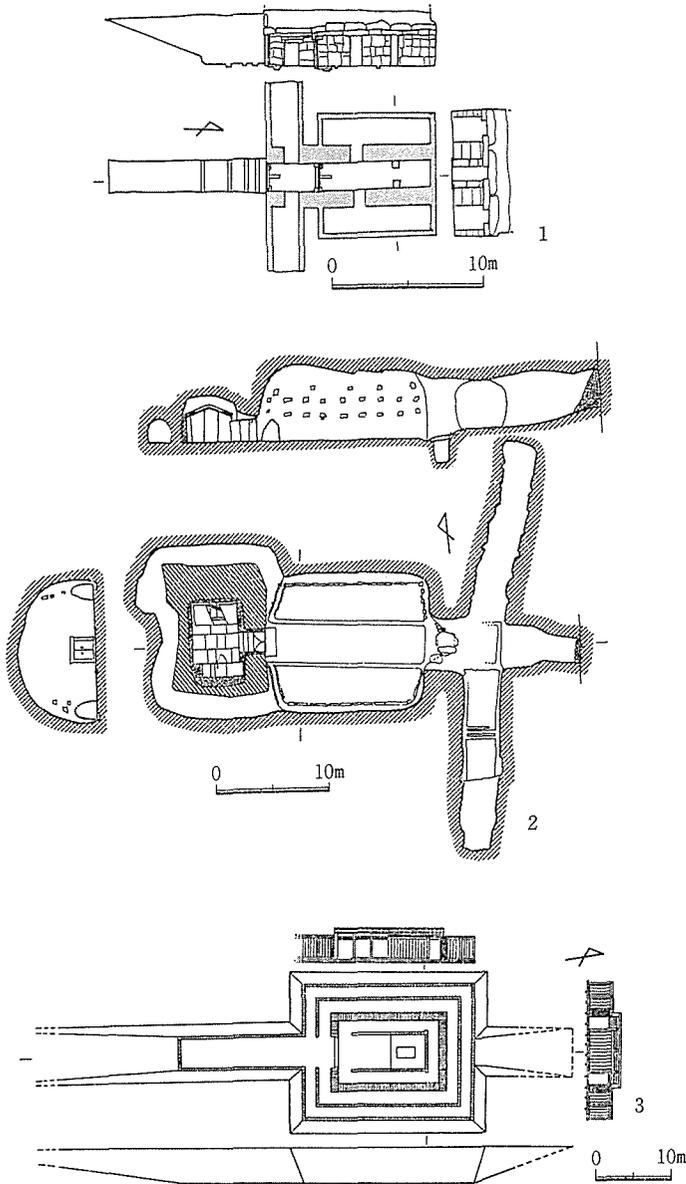


図8 前漢期の室

- 1 広州南越王墓 2 河北満城中山王墓M1 3 北京大葆台漢墓M1

の間の要地および棺室を中央に配置することなどは、長沙象鼻嘴一号墓と似たところが多い。とくに中央棺室の左右と後に通過甬道によって連結する殉葬者の棺や副葬品を入れる側室は、まさにその用途や配置において回廊施設と類似する。各室の天井部はすべて切石をかけた平頂であるが、中央棺室と両側室の天井部のみ、断面が凸字形を呈して意識的に高く

されている。傾斜墓道は墓室寄りのところで一段（〇・四メートル）下がるが、そこから墓門まで墓壙底部と同一平面となっており、そこに据えられた副葬品や殉死者の木棺などの存在によって、その部分が羨道としての性格を強くもっていることが窺える。

中山王劉勝の墓（紀元前一三三年）と判明している河北滿城漢墓M一もこの時期のもので、自然の岩山を掘り抜いた大型崖墓である。^⑧羨道、側室、玄門、前堂・後室および後室を囲んだ回廊施設などが中軸線上に配置されている（図八一②）。室内の天井部はすべてアーチ頂で、かつて中心部に位置する棺室が明らかに全体の後側に下がり、中に板石で組み立てた石屋型施設が組み立てられており、その中に簡素な箱型柳と木棺を置く。棺室を囲んだ回廊施設は、前堂奥壁の左右にとりつくが、初現期の機能と性格がすでに退化して柳型回廊式柳の名残りを見ることが出来る。棺室の前方は全室中、最大の空間を構成し、アーチ頂の高さは六・八メートルを測る。中に瓦葺の殿堂風建築が作られ、本格的な祭祀堂が確立した形態と言える。それは柳型回廊式柳の内外二重の玄門に挟まれたところに出現した祭祀空間がより機能を拡大させた姿と考えられる。こうして祭祀前堂と被葬者の居場所としての後棺室という前堂・後室プランが確立したのである。

以上のように、この時期には従来の柳の構造のもとに新しい転換が見られた。つまり、一期に遡る玄門の創設や横入口の整備、回廊を中心とした開通型の内部構造の誕生に続いて、アーチ頂の導入も加えて、立体的な空間をもつ室墓が成立したのである。この二期は、紀年銘や遺物などによって前漢中期（武帝、昭帝期、紀元前一四〇〜七四年）に相当する。

〈三期〉この時期には、まだ箱型柳や間仕切柳が周辺地域で採用され続けているが、中心地域では回廊型と中軸線配置型の室墓が一段と発達する。とくに祭祀堂の天井部の増大が特徴である。

広陽頃王墓（紀元前四五年頃埋葬）に比定されている北京市大葆台漢墓がこの段階の室墓である。墓全体は角材、丸太材を用いて構築されており、構造自体がちょうど高郵天山一号墓と長沙象鼻嘴一号墓の継承形態とであることがわかる。墓壙の外周壁と内、外二重の隔壁とがよく整っており、さらにその内側にもう一重の「黄腸題湊」壁を配置することによって

内、外二重の回廊施設ができています。ここでは仕切板はいっさい設置されておらず、完全に開通した回廊からなる回字形配置となっている(図八一3)。天井部は従来の通り平頂であるが、長方形中心施設の天井部は、周りの回廊天井部よりほぼ一メートル持ち上げられている。

回廊に囲まれた長方形の中心部は、前・後の二部に分けられている。後部は棺を納める空間で、三面囲の隔壁内側に三重の棺を据える簡素な箱型槨が置かれている。前部の頂部は後部より高く、その出土遺物や位置などの検討によって、そこが発達した墓内の最も重要な祭祀空間であることが知られる。両支門間の祭祀空間がここではすでに機能分化し、四方通過甬道と独立した祭祀空間に変化したと思われる。墓道の底面はいったん水平となり墓室底部に続く。墓壙に沿う槨の外壁は墓道の水平部分にまで拡大しており、そこに三台の馬車と十三匹の馬を並べて埋葬してあった。これはまさしく羨道部の確立と言える。

つまり、大葆台漢墓は一見Ⅲ型2式の槨護型槨回廊式を思わせるが、詳細に考察すれば、完全に整備された羨道、支門や中心施設をめぐる回廊施設および祭祀前堂の形成などの点から回廊型単棺式室と中軸線配置型二室式の折衷形態であることが指摘できるのである。

一方、角材で組み立てた木造室墓は、湖南省長沙の前漢後期の長沙王族「劉驕」墓^②や竹簡文紀年によって中山懷王の劉修墓(紀元前五五年)と推定される河北省定興八角廊M四〇^③にも見られる。盗掘や自然による破壊、発表資料の不備などによって室内の構造や天井部の状況を詳しく検討することは困難であるが、平面プランは回字形ではなくほぼ中軸線配置型二室式であることが知られる。

またこの時期において槨から室への転換は王侯墓以外の各地域の中・小型墓にも多く見いだせる。典型的な回廊型の磚室墓は河南省南陽唐河の「馮君孺人」墓^④(図六一1)で、祭祀前堂の天井部の整った穹窿頂がもっとも特徴的である。線刻銘文によって被葬者の実名や漢代「都平大尹(都平郡守)」の身分、「始建国天鳳五年(紀元一八年)」の埋葬年代などが知ら

れている。

他に、中軸線配置型二室式を代表するものとして、地方官吏の河南省洛陽「卜千秋」壁画墓(図六一²)と洛陽燒溝漢墓M六三二(図六一³)が挙げられる。ともに坑道式磚室墓で、中心墓室の天井部は、成熟したアーチ頂で、先述したように前者が地域色である四注式屋根形頂、後者が微穹窿頂の仕組みを作りだしているのが注目される。特に燒溝M六三二の場合、微穹窿頂の初現は、棺室より前室の方に見られることが興味深い。ここでもやはり四方へ通路がのびる前室が室全体の中に特別な空間として扱われている。各通路のアーチ頂の交点に微穹窿頂の創出が見られるようになったのである。

以上に挙げた墓例は、紀年銘や室墓の特徴によって前漢後期(宣帝〜王莽時期、紀元前七三〜紀元二四年)の王侯クラスの墓に比定できる。それゆえ、柳から室への変容は大型墓にまず起こったことがわかる。しかし、中、小型墓もその影響を受けて室を志向し、地域色に染まりながらも短期間のうちに室墓は漢の全領域に定着したと考えられる。

3 後 漢

後漢期に入ると横穴系室墓がより一層定形化していく。特に天井部の整備と増大にに応じて、磚を機能的に生かしたアーチ頂と穹窿頂が見事に発達する。また、これまでの貴重な角材に取って変わり、磚(石)室墓が急増し社会の各階層に採用された。ただし一部の地域や辺境地帯では例外的に角材で組み立てた室墓が後漢後期まで採用されている。

それら室の変化から後漢期も三時期に分けて整理することができる。

〈一期〉前漢期に引き続いて回廊型の単棺室・双棺室墓が構築される。河北省定県北莊漢墓²⁴は、紀元五六〜八八頃に埋葬された中山簡王の墓である(図五)。切石と磚で回廊型単棺室墓を構築し、前室のアーチ頂は室内の最高位に達している。その外側に磚で壁を設け、室全体を覆う形に作られ、その上にさらに蓋石を置くといった点は、いまだ長沙象鼻嘴一号墓

と類似している。

回廊型双棺室としては江蘇邗江甘泉で調査された大型磚室墓^③が挙げられ、構造全体は定県北莊漢墓と一致している。前堂部が一層増大して室内面積の約三分の一強を占め、同大の双棺室がその後方に続いている。回廊施設や玄門などはすでに簡略化を見せ、アーチ頂の各室中、前堂部が一番高く中心的な存在である。出土した金印や遺物によって、後漢永平十年(紀元七七年)に埋葬された「広陵王」夫婦の合葬墓であることが判明している。

河南省南陽楊官寺漢画像石墓^④も、回廊型双棺室に対応した双門を有し天井部が平頂であるが、前室だけが一段高くしてある。またもっと簡略化した形態のものに河南省南陽英莊磚室墓がある^⑤。室全体は、高大なアーチ頂をもつ前堂と並列した双棺室とから構成され、まさに回廊を省略した回廊型双棺室のようであるが、一方で中軸線配置型三室式の基本構造が整っている。

典型的な中軸線配置型二室墓は、「永平十六年(紀元七三年)」埋葬された河南省偃師県「姚孝経」墓^⑥で、アーチ頂をもつ横長前堂と平頂の後室を有している。

以上に挙げた例は、後漢前期(光武帝、明帝時期、紀元二五～七五年)にあたる。当該期において、一部の地域を除き、柳墓に代わって回廊型と中軸線配置型の磚室墓が主として作られた。そのうちよく整った回廊型室墓は埋葬施設の伝統の上に構築の複雑さを備え、王侯や郡守クラス以上の身分に限られていたようである。

〈二期〉 中軸線配置型二室墓が機能的に整いながら圧倒的に優勢となり、全土に広がるように構築されていった。

陝西省長安県三里村磚室墓^⑦は、線刻記年によって「永元十六年」(紀元一〇四年)の実年代が知られている。室全体は墓道、羨道、玄門および穹窿頂前堂・アーチ頂後室が中軸線上に並び、広大な前堂の両側に二つのアーチ頂側室がある。前述した陝西省長安県南李王村M三^⑧(図六一四)も同様の構造をもち、広大な穹窿頂前堂が特徴的である。

そしてこの時期の大型墓には前堂・後室の前方に、より一層整備された構造が現れ、前庭・中堂・後室の三室プランが

登場した。河南省襄城茨溝画像磚(石)漢墓^⑧は、羨道、羨門・玄門や前堂(庭)・中堂・後室が中軸線上に並び、また室内の各空間をつなぐ通過甬道などがよく整っており、すでに定形化した様相を見せている。中堂および後室の穹窿頂が目立つが、その他はアーチ頂である。中堂の北壁に「永建七年(紀元一三二年)正月十四日」という線刻紀年がある後漢中期末の大型磚室墓の代表例である。陝西省華陰県の後漢司徒「劉崎」(紀元一三五五年死志)墓も同型式であるが、前庭に付く同形の両側室は、回廊の名残ではないかと思われる。ここでは前庭だけが広大な穹窿頂で、その他の各室はアーチ頂である。

以上の例は、記年銘磚や印章によって、後漢中期(章帝・質帝期、紀元七六～一四六年)に帰属することが分かる。すなわちこの期にはⅡ型1式の中軸線配置型二室墓が圧倒的に多く、つづいてⅡ型2式の中軸線配置型の三室構造が出現した。一方、大型墓において回廊型室の減少や回廊施設の簡略化が一部の地域を除いて進んだ。

〈三期〉 回廊型室墓は、紀元一五一年に埋葬が行われた江蘇省邳県彭城相繆宇墓^⑨とほぼ同時期の山東省濟寧県の任城王族墓^⑩など、切石積の同類型のものが少数残っている。これらの前堂・後室の天井部はすべていわゆる三角持ち送り式(疊波頂)である。

中軸線配置型三室墓では、前述した紀元一七〇年頃の内蒙古和林格爾の漢代護烏恒校尉墓(図六―五)がその典型である。また、後漢後期の中山王劉暢(紀元一七四年死志)夫婦の合葬墓と推定されている河北省定興北陵頭M四三^⑪は、磚室構造が二期の陝西「劉崎」墓と一致するが、後棺室は双棺室になっている。紀元一七六年に構築された後漢安平国の王公貴族墓は、中軸線配置型三室式の両側に側室を加えて合計十室にもなる最も複雑な大型磚室墓である。

これらの墓例は、磚刻紀年銘によって、後漢後期(恒帝・献帝期、紀元一四七～二〇〇年)に比定できる。三期には回廊型室が周辺地域の大型墓にわずかに残るが、中軸線配置型室墓が絶対的な存在となり、三室式が大型墓に多くなる。室の頂部はアーチ頂か穹窿頂で、中堂の天井部は全墓室の中で一番高い。

ところで、漢帝国の辺境地域である楽浪郡では、後漢時期でも地方官僚クラスの墓に槨墓がよく採用された。早期段階

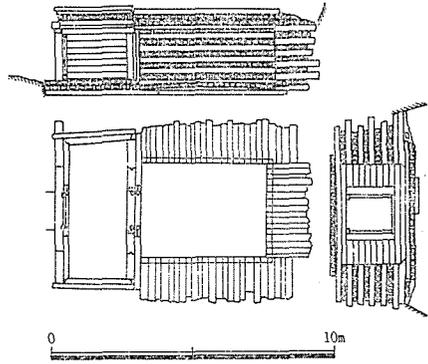


図9 楽浪彩窟塚

のものは、間仕切型柳墓が多く見られるが、ここでも時期が新しくなると木造と小磚作りの室墓に変わった^⑬。つまり中心地域と比べて時期のずれが見られるのだが、柳から室への変容の様相は一致している。朝鮮民主主義人民共和国平壤市で調査された後漢後期の楽浪彩窟塚^⑭は、角材で組み立てられたもので、墓全体は羨道、二重支門、横長形前堂と縦長形後植室から構成されている(図九)。その平面プランを見れば、柳護型回廊式柳の中心部施設に相当することがわかる。後室の左右、後側の計三面には、手厚く積み重ねた「黄腸題湊」壁に似た仕組みが見られる。このように、彩窟塚にも柳と室の両方の要素が見い出せ、まさしく柳から室への変容の実体を物語っている。

- ① 河南省文物研究所等『浙川下寺春秋楚墓』文物出版社、一九九一年。
- ② 韓健、焦南峰『秦都雍城考古発掘研究総述』『考古与文物』一九八八年五・六期。
- ③ 中国科学院考古研究所『颍川楚墓報告』科学出版社、一九五六年。
- ④ 湖北省荆州地区博物館『江陵雨台山楚墓』文物出版社、一九八四年。
- ⑤ 湖北省荆沙鐵路考古隊『包山楚墓』文物出版社、一九九一年。
- ⑥ 駐馬店文化局等『河南正陽蘇莊楚墓發掘報告』『華夏考古』一九八八年二期。
- ⑦ 湖北省荆沙鐵路考古隊『包山楚墓』(前掲)。
- ⑧ 河南省文物研究所『信陽楚墓』文物出版社、一九八六年。
- ⑨ なお、文献に見える「黄腸題湊」という特殊な構は、秦、公大墓で似たような部分が見出されたと言われるが、これ以外、文献記載に完全一致するような調査例はまだ見あたらない。
- ⑩ 中国社会科学院考古研究所『西安北郊漢墓發掘報告』(前掲)。
- ⑪ 張達宏等『西安北郊龍首村軍幹所漢墓發掘簡報』(前掲)。
- ⑫ 西安市文物管理处『西安医療設備廠福利区九二号漢墓清理簡報』(前掲)。
- ⑬ 呼林貴等『西安東郊國棉五廠漢墓發掘簡報』(前掲)。
- ⑭ 湖北省文物考古研究所『江陵鳳凰山一六八号漢墓』(前掲)。
- ⑮ 湖南省博物館『長沙砂子塘西漢墓發掘簡報』(前掲)。
- ⑯ 湖南省博物館等『長沙馬王堆一号漢墓』(前掲)。
- ⑰ 鄭洪春他『陝西省新安碑廠漢初積炭墓發掘報告』『考古与文物』一九九〇年四期。
- ⑱ 長沙市文化局『長沙戚家湖西漢曹孌墓』(前掲)。

- 19 宋少華等「長沙西漢王室墓の発掘概述」(前掲)。
- 20 湖南省博物館「長沙象鼻嘴一号西漢墓」(前掲)。
- 21 中国科学院考古研究所「新中国的考古发现和研究」(前掲)。
- 22 广州市文物管理委员会、广东省博物館「西漢南越王墓」文物出版社、一九九一年。
- 23 中国社会科学院考古研究所等「滿城漢墓發掘報告」文物出版社、一九八〇年。
- 24 中国社会科学院考古研究所「北京大葆台漢墓」文物出版社、一九八九年。
- 25 中国科学院考古研究所「長沙發掘報告」科学出版社、一九五七年。
- 26 河北省文物研究所「河北定県四〇号漢墓發掘簡報」『文物』一九八一年八期。
- 27 南陽地区文物隊、南陽博物館「唐河漢都平大尹馮君婦人漢画像石墓」(前掲)。
- 28 洛陽博物館「洛陽西漢卜千秋壁面墓發掘簡報」(前掲)。
- 29 河北省文化局文物工作隊「河北定県北莊漢墓發掘報告」(前掲)。
- 30 南京博物院「江蘇邗江甘泉二號漢墓」『文物』一九八一年二期。
- 31 河南省文化局文物工作隊「河南南陽楊官寺漢画像石墓發掘報告」『考古學報』一九六三年一期。
- 32 南陽地町文物工作隊、南陽県文化館「河南南陽県英莊漢画像石墓」『文物』一九八四年三期。
- 33 偃師商城博物館「河南偃師東漢姚孝經墓」『考古』一九九二年三期。
- 34 陝西省文物管理委员会「長安三里村東漢墓發掘簡報」『文物參考資料』一九五八年七期。
- 35 貞安志他「長安県南李王村漢墓發掘簡報」(前掲)。
- 36 河南省文化局文物工作隊「河南裴城茨溝漢画像石墓」『考古學報』一九六四年一期。
- 37 杜保仁等「東漢司徒劉喆及其家族墓的清理」『考古學報』一九八六年五期。
- 38 南京博物館等「東漢彭城相繆宇墓」(前掲)。
- 39 濟寧市博物館「山東濟寧發現一座東漢墓」(前掲)。
- 40 內蒙古博物館、文物工作隊「和林格爾漢墓壁畫」(前掲)。
- 41 定県博物館「河北定県四三號漢墓發掘簡報」(前掲)。
- 42 河北省文物研究所「安平東漢壁面墓」文物出版社一九九一年。
- 43 楽浪漢墓刊行会「楽浪漢墓」第二冊、真陽社、一九七五年。
- 44 朝鮮古蹟研究会「朝鮮考古資料集成、昭和九年度、楽浪彩霞塚」『古蹟調査報告』補卷一、一九三四年。

四 柳墓から室墓への変容

前章までの考察を通じて、中国古代社会における埋葬施設を概観し、漢墓の構造的特徴や時期別の変遷を明かにした(図七)。柳は階級の発生に伴い、棺や副葬品を内蔵するために生まれたものであり、柳墓は時代の精神を写しながら多種多様に変遷を遂げた。それが前漢中期に室墓へと動きだし、室墓は少数地域を除いてその後の墓制の主役となった。そして

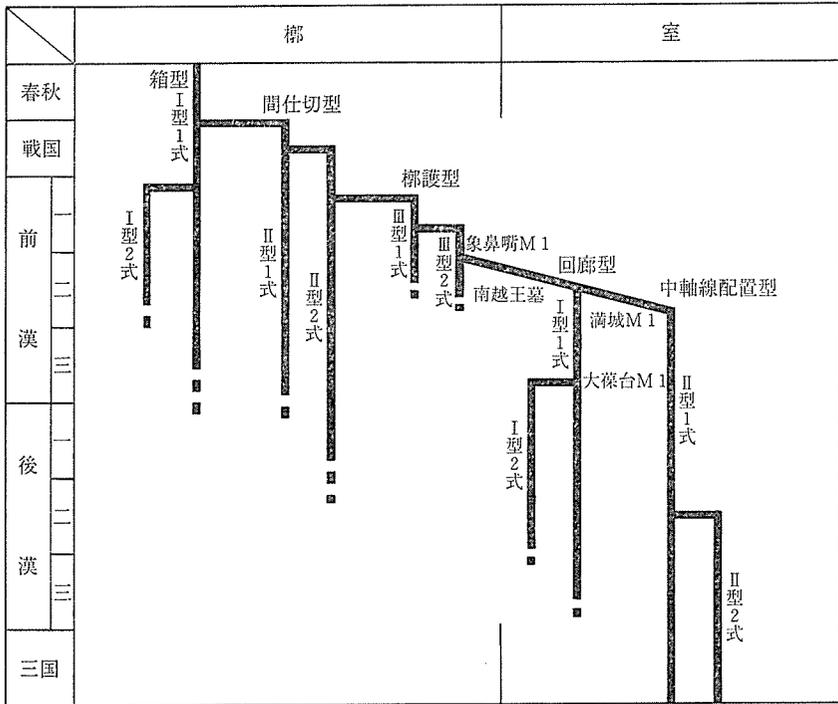


図10 漢墓構造の変遷図

漢墓は前漢後期に歴史の舞台から徐々に消えていった。この漢墓の変容は前漢前期においてまず大型墓から始まったが、時間をあまり置かず、中・下層クラスの埋葬施設まで広まっていた。

前章においては、典型的な槨と室とともに地方的特色の強い漢墓もあわせて変遷過程を辿ったために記述が複雑になったきらいがある。ここではその変容のあり方をまとめてみることにする。

漢墓の変容につながる第一歩はまず、前漢前期に創出された槨護型回廊式槨に見られる回廊施設の形成、玄門や横入口の整備による密閉性の喪失であったとすることができよう。

「黄腸題湊」という特殊な壁には、従来の槨を保護、固定する効果がある。それが回廊の形成に大きな影響を与え、長沙象鼻嘴一号墓などが登場したのである。ただ初期段階には槨の仕切が従前のまま残っているが、発展形態として仕切板ごとに実用の扉が一つずつ付いている。それは開通型槨への移行を象徴して重要である。墓道底部と槨

底部の段差もなくなり、二重の玄門や横入口構造とともに、伝統的な隔絶した埋葬施設が崩れていったことが看取できる。

この動きに続いて現れるのが、祭祀空間の独立であった。単純化すれば、象鼻嘴一号墓の両支門間の要地がもつ祭祀空間としての機能が発達して祭祀前堂の形成に至るのであるが、それには以下の変容期の諸例からわかるように複雑な過程を経たようである。それはやがて中軸線配置型三室式墓へと移行し、定式化した。

広州南越王墓は前室両側、中央棺室の左・右および後側に配された側室が、ちょうど槨墓の回廊施設に当たり、「回廊形側室」とも呼べる。そして両支門の間は一つの前室としての空間を形成しはじめていた。

それが河北滿城漢墓M一になると、内外二重の玄門施設は消失し、その代わりに羨道、四方通過甬道の整備、祭祀前堂の拡大がなされ、室全体は羨道、通過甬道、前堂・後室の中軸線配置がはっきりしてくる。前述した両支門の間の要地は四方通過甬道と別に発達した祭祀前堂に変わり、もっとも広大な空間を形成している。ここでは回廊施設はまだ設置しているが、後棺室しか囲まず、すでに退化した形になっている。以上の要素を見ると、まさしく室墓の完成形態と言える。

こうした漢墓の変容過程は一本の流れで画一的に進行したのではない。それをもっとも裏付ける例が前漢後期の北京大葆台漢墓であった。前述したように槨護型回廊式槨を踏襲しながら、角材で広大な前堂・後室を見事に作り上げている。

ここでは「黃腸題湊」壁の内側において祭祀空間が発達し、また棺を置く空間が後方に下がっている。すなわち回廊型室と中軸線配置型二室式の両方の要素を有している。そしてまた後漢中期に登場する中軸線配置型三室墓は従来の二室墓の四方通過甬道の空間が発達する中で形成されたと考えられる。

以上の分析を基本にして(図十一)のように槨から室への変遷模式図がまとめられる。A図は、長沙象鼻嘴一号墓をモデルにした槨護型回廊式槨墓で、B図は、南越王墓を手本にした石室墓である。両者は建材や作り方が異なっても、中心施設的位置と基本的な利用空間が一致しており、直接に中軸線配置型二室式の祖形となることがわかる。C図は、北

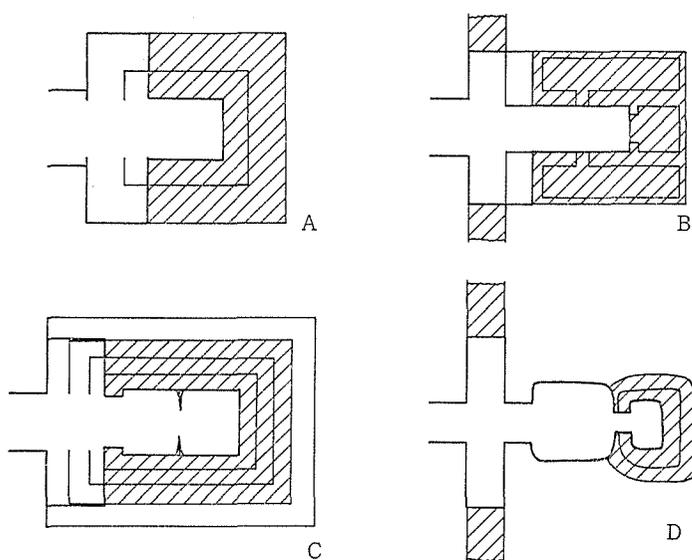


図11 漢墓変容の模式図

京大葆台漢墓をモデルにした木造室墓で、D図は、河北滿城の中山王崖墓を手本にしたものである。この両者も外形、建材、そして作り方を違えながら、基本構造の有効な利用空間は一致している。A、B図に共通して重視された十字形の空間は、中小型漢墓の横長形前堂と縦長形後室の構造プランに一致している。またC、D図の模式は、A、Bの変化で捉えられる。入口側の空間すなわち内外両玄門の間に挟まれた空間が、四方通過甬道と広大な祭祀前堂とに分化し、中軸線配置型二室式に定式化するのである。これからさらに、入口側の四方通過甬道が拡大整備されると、前庭・中堂・後室という中軸線配置型三室式のプランが完成することになる。こうして中国古代建築の主流である中軸線建築プランにも合致するようになったのである。

こうした平面プランとともに大きく変化した漢墓の構造は、言うまでもなくアーチ頂と穹窿頂であり、焼溝漢墓でも頂部の形態が平頂から弧頂、続いてアーチ頂、穹窿頂の順に変化していったことが知られている。ところで焼溝漢墓の一、二期すなわち前漢中期から後期にかけては、洛陽地域には木槨墓は見あたらず、土壙墓以外はすべて坑道式空心磚墓であった。この限られた地域でしか流行していない空心大磚墓の古いタイプは、箱型槨の構造であったが、前漢後期になると、焼溝M一〇二のように箱型構造から屋根形へ移り変わる。これを穹窿頂の起源

と捉えられる。こうした平面プランとともに大きく変化した漢墓の構造は、言うまでもなくアーチ頂と穹窿頂であり、焼溝漢墓でも頂部の形態が平頂から弧頂、続いてアーチ頂、穹窿頂の順に変化していったことが知られている。ところで焼溝漢墓の一、二期すなわち前漢中期から後期にかけては、洛陽地域には木槨墓は見あたらず、土壙墓以外はすべて坑道式空心磚墓であった。この限られた地域でしか流行していない空心大磚墓の古いタイプは、箱型槨の構造であったが、前漢後期になると、焼溝M一〇二のように箱型構造から屋根形へ移り変わる。これを穹窿頂の起源

とする意見があることは前にも述べた。しかし、陝西省西安市、つまり前漢代の都地域ではアーチ頂の小磚積みの墓は、少なくとも前漢中期後半に出現している^①。そして、この小磚積みのアーチ頂から、磚などの建築部材を用いた穹窿頂が発達していったことが前漢後期の焼溝M六三二から窺い知れるのである(図六一4)。ここでは各空間のアーチ頂が交差する四方通過甬道の天井部にまず擬穹窿頂が現れていることが確認できる。おそらく空心大磚墓の頂部もその影響を受けて変化したのであろう。

磚積みの穹窿頂は、墓室内の限られた空間をより一層立体的に変貌させた。こうしてアーチ頂と穹窿頂は横穴系の室墓の構造的な特徴となり、あとの時代や東アジアの墓制に大きな影響を与えることになったのである。

最近、中国黄土高原に分布している窯洞式住居に先史時代からアーチ頂や弧頂(原論文に「穹窿頂」と呼ぶが)がすでに採用されていたことが明らかになってきた^②。また、この窯洞式住居とほぼ同じ時期、同じ地域には坑道式土洞墓が見られ、その頂部も丁寧なアーチ頂や弧頂となっている^③。すなわち、アーチ原理と構造は、先史時代から中国本土に存在していたのであり、漢墓がその変容に際してそれを取り入れたと考えても何の不思議なことでもないのである。つまり、アーチ頂と穹窿頂は、中国本土の文化を背景に自発的に生み出されたのであり、漢墓の変容はいずれも内在的な変遷過程を辿ったものであることを重ねて強調しておきたい。

① 京都大学大学院文学研究科に平成四年一月提出した筆者の修士論文「漢墓の地域性」による。

② 胡謙盈、張孝光「論窯洞——考古中所見西周及其以前土洞穴房墓址研究」『考古学論集』三、文物出版社、一九九三年。本論中、窯洞の頂部を平頂、アーチ頂、穹窿頂の存在を提唱しているが、その図面を観察してみると土洞頂部を単に弧状に整備した痕が見られるにすぎず、後の磚を用いて四隅から頂部へ積み上げる穹窿頂とは、構造上の隔た

りが大きいことが明らかである。弧頂と呼ぶべきである。なお、洛陽燒溝漢墓にはこれと類似する弧頂墓がある。

③ 謝端琚「試論我国早期土洞墓」『考古』一九八七年十二期。ここでは「穹窿頂」の用語を採用しているが、実際、窯洞頂部の類例と同じように「弧頂」と呼ぶべきである。穹窿頂とは、建築部材を用いて作ったドーム形天井を指すものである。

五 むすびにかえて

それでは、漢墓の槨から室への変容は、どのような埋葬思想の変化に関連しているのであろうか。最後に文献資料を参照して考察してみたい。

そもそも槨墓では保護、密閉、防腐などの面が重視されていることから、漢代以前における古代社会の権力者の避邪、昇天の思想が推察できる。ところが、上述の検討により、前漢前期から中期にかけて、それまで槨墓がもっていた隔絶・密閉のための深い埋蔵という観念と相反して、地下の埋葬施設を地上の建築風にするという発想に基づき、堂々と仕上げようとする思想が生じてきたことが判明した。文献を調べてみると、埋葬施設を「室」、「房」とみるのは、やはり漢代以降のことであるらしい。『呂氏春秋』「節葬篇」に「国弥大、家弥富、葬弥厚、……題湊之室、棺槨数製、積石積炭、以環其外」とある。室と呼んでいるものが「黄腸題湊」の構造に直接つながることは注目すべきである。また、『漢書』「霍光伝」に大臣霍光が宣帝の地節二年（紀元前六八年）に亡くなったとき、皇帝から「梓宮、便房、黄腸題湊各一具、椁木外藏槨十五具」を下賜されたという記録がある。ここでいう「宮」、「房」とは、埋葬施設の槨構造を指すもので、同じく「黄腸題湊」と関連する記事として述べられていることも興味深い。つまり、先の考古学の検討結果と一致して、室墓の形成は、槨墓の変容に基づくもので、特に「黄腸題湊」の形をした槨型回廊式槨墓と密接に関係することが語られているのである。

こうした漢代の変容は、当時の社会全般における思想儀礼の変革を直接に反映していると考えられる。文献にも『後漢書』「志第六・礼儀下」の記載に「合葬、羨道開通、皇帝謁便房。太常導至羨道、去杖、中常侍受、至柩前、謁、伏哭止如儀。辞、太常導出、中常侍授杖、昇車帰宮。」とある。すなわち遅くとも後漢時期において葬送の執行者が槨墓の中に入り、祭祀の儀礼を行った事は明白である。

漢代初期には、先秦期の諸理論学説は融合され、儒学が支配者の指導理論として樹立された。そして、天上の神権と地上の皇権とを統一するようになった。「序君臣父子之礼、列夫婦長幼之别」を中核とする儒学思想は、商・周時代における「祭政合一」の社会秩序を変えて、自らの祖先を崇拜し、そして現実生活を死後の世界にも投影させるようになったのである。漢墓における横穴系室墓の確立、とくに墓内の祭祀堂の発達は、従来の別域での天と地や祖先を祭るという風習を変えて、埋葬に伴う墓前、墓内の祭祀行為や、被葬者本人に対する個別の祭祀儀礼を行うようになった歴史事実を物語っている。このように、槨墓から室墓への変容は、当時の社会的な理念を忠実に反映したものであったと考えられる。そして画像(磚)石や壁画の内容、副葬品の明器的性格の発達なども、すべて室の構造の確立と共に、その社会的な変化を反映したものであったと言えよう。

〔謝辞〕 本論作成にあたって小野山節先生から御指導をいただきました。資料分析、問題検討に際して高橋克壽氏からさまざまな御教示を賜りました。森下章司、一瀬和夫、山本圭二、大賀克彦、富井眞、南康子氏ら及び向日市埋蔵文化財センターの諸先生、京都大学文学部考古学研究室の諸兄姉には有益な助言や多大なる恩恵を得ています。紙面を拝借して、心より御礼を申し上げます。

図 版 出 典

〔図一〕 1、中国社会科学院考古学研究所『北京大葆台漢墓』(一九八九年) 図二五。2、湖北省荆沙鐵路考古隊『包山楚墓』(一九九二) 図七。3、湖南省博物館「長沙象鼻嘴一号西漢墓」『考古學報』(一九八一年一期) による筆者の復原案のもとに、南康子氏が製図をした。

〔図二〕 1、河南省文化局文物工作隊『和林格爾漢墓壁畫』(一九七八年)。

〔図三〕 1、張達宏等『西安北郊龍首村軍斝所漢墓發掘簡報』『考古學文物』一九九二年六期、圖一。2、呼林貴等『西安東郊國棉五廠漢墓發掘簡報』『文博』一九九一年四期、圖一。3、湖北省文物考古研究所「江陵鳳凰山一六八号漢墓」『考古學報』一九九三年四期、圖二・三・五に加筆改作。4、湖南省博物館「長沙砂子塘西漢墓發掘簡報」『文物』一九六三年二期、圖一・二加筆改作。

- 〈図四〉 1、長沙市文化局「長沙戚家湖西漢曹嬬墓」『文物』一九七九年三期、図二・一九および俞偉超「漢代諸侯王与列侯墓葬的形制分析——兼論「周」、「漢制」、「晋制」的三段階性」『中国考古学会第一次年会論文集』(一九八〇年) 図二の3に加筆改作。 2、湖南省博物館「長沙象鼻嘴一号西漢墓」『考古學報』一九八一年一期、図三・四・五に加筆改作。二重の玄門施設の部分拡大図、同報告の図六。
- 〈図五〉 河北省文化局文物工作队「河北定県北莊漢墓發掘報告」『考古學報』一九六四年二期、図二・三に加筆改作。
- 〈図六〉 1、南陽地区文物隊等「唐河漢都平大尹馮君孺人漢画像石墓」『考古學報』一九八〇年二期、図二・三に加筆改作。 2、貞安志他「長安原南李王村漢墓發掘簡報」『考古与文物』一九九〇年四期、図一。 3、洛陽博物館「洛陽西漢卜千秋壁面墓發掘簡報」『文物』一九七七年六期、図二。 4、『洛陽燒溝漢墓』(一九五九年) 図一四甲・一四乙に加筆改作。前室天井部の微穹窿頂の部分拡大図、同報告。 5、内蒙古博物館等「和林格爾漢墓壁畫」(一九七八年) 図三・四・五に加筆改作。
- 〈図七〉 1、中国科学院考古研究所「輝県發掘報告」(一九五六年) 図一〇七に加筆改作。 2、湖北省荆沙鐵路考古隊「包山楚墓」(一九九一年) 図四・五・六・九に加筆改作。 3、駐馬店文化局等「河南正陽蘇莊楚墓發掘報告」『華夏考古』一九八八年二期、図二に加筆改作。 4、『包山楚墓』(一九九一年) 図三・三・三五に加筆改作。 5、河南省文物研究所「信陽楚墓」(一九八六年) 図五・七・八・一五に加筆改作。
- 〈図八〉 1、広東省博物館「西漢南越王墓」(一九九一年) 図五・七・八に加筆改作。 2、中国社会科学院考古研究所等「滿城漢墓發掘報告」(一九八〇年) 図四・五・六に加筆改作。 3、中国科学院考古研究所「北京大葆台漢墓」(一九九一年) 図三・一〇・一二に加筆改作。
- 〈図九〉 朝鮮古蹟研究会「朝鮮考古資料集成、染浪彩篋塚」『古蹟調査報告』補卷1(一九三四年) 第八図・図版第三五に加筆改作。

(京都大学大学院文学研究科博士後期課程)

Changes in Tomb Styles during the Han Period

—From *GUO* 槨 to *SHI* 室—

by

HUANG Xiaofen

The two most characteristic structures of ancient Chinese tombs are the timber compartment *GUO* and corridor style chamber *SHI*. The former was a traditional pit-style timber compartment to protect the coffin, and the latter was typically a corridor style chamber made of tiles. The change from the *GUO* to *SHI* styles which occurred during the Han Period was greatly influential throughout East Asia. Because of the complexity and diversity of the two styles an integrated understanding of the concrete processes of transformation has not yet been possible. In this paper, based on a typological study of the structures of Han tombs, a classification of *GUO* and *SHI*, together with a clarification of the process of transformation are proposed. The introduction of a corridor space and the addition of a side entrance, followed by the development of a rites area, played a determinative role in this process. These changes which occurred were fundamental to the nature of the tomb: the space in which the body and goods representing his status had previously been laid became the place for the performance of burial rites in accordance with the social position of the deceased.

Civil Governors 觀察使 of the Tang Dynasty: a study on the Provincial Command 藩鎮 System

by

CHEONG Byungjun

The intention of this article is to throw some fresh light on the system of provincial command under the Tang dynasty by reexamining the dynasty's local government policy. Previous studies of provincial command